

THE GOLD

平成15年1月1日発行
(毎月1回1日発行)
第20巻第1号(通巻240号)

2003

1

Relay Travelogue

City Scope

川の道を
往き交う唄

京都・古都の
老舗で、雅を買う。
The Gold's Special

春薰る萩・津和野の
芸術散歩2日間

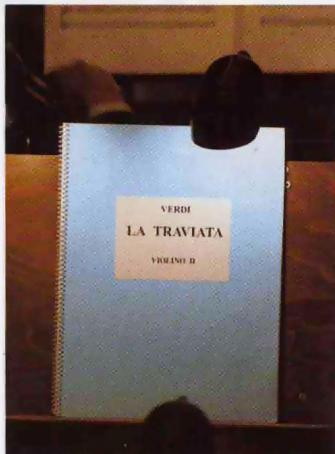


特集=

Charmantes Wiener Blut

優雅なる
ウイーン気質

JCB
future, together.



指揮壇に置かれた「ラ・トラヴィアータ(椿姫)」の総譜。ヴェルディの音楽は変わらずとも、指揮者、演出家の解釈がさまざまな舞台を生み出す

ギュルテル沿いのフォルクスオーバーは、日本ではいささか誤解にさらされている。「オペレッタだと思つて訪れた方が超モダンな出し物に憮然としたり、どうしてオペラやつるの、といわれるのは残念ね」と、ここで四半世紀ヴァイオリンを弾いているシェンナード木都子さんが語るよう、ヨーロッパの歌劇場ではありまえのレパートリーであるにもかかわらず、第二国立歌劇場、オペレッタ劇場と思われている。

たしかに、一八九八年創設のこのオペラ劇場はその名称「フォルク（民衆）」が示すように人々に親しまれる作品を提供してきた。国立歌劇場では見られないドイツ歌劇「オペレッタ」、ミュージカルを上演してきたし、モーツアルトの「魔笛」の上演回数は国立歌劇場を上回っている。

近年レパートリーの多彩さに加え、実力派や気鋭の演出家の起用、新人歌手の発掘によるベルカントオペラ、ワーグナーの大作、あるいは世紀末

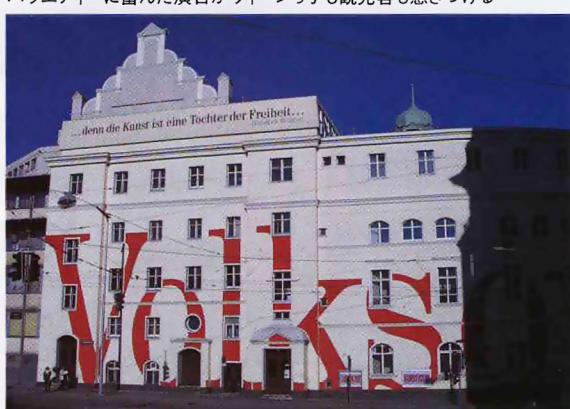


喜怒哀樂が凝縮された宝箱 ウイーン人が愛するフォルクスオーバー

のツエムリンスキーや現代作品をもつて国立歌劇場を脅かす存在となつた。盛大な喝采とブーイングのエキサイティングな応酬はこのオペラ座の精力的な活動を物語るものだ。

一九九九年に総監督となつたメンタはこの路線を継承し、音楽監督に古楽から現代までカバーする鬼才ヘンゲルブロックを招聘するとともに、各国のオペレッタの発掘、人気美力量者を招いてのミュージカル、創作ダンスを軸としたバレエ、オペラ

外壁の色鮮やかなフォルクスオーバーの文字が印象的なハウス。バラエティーに富んだ演目がウイーンっ子も観光客も惹きつける



©Volksoper Wien



演出助手との和やかな打ち合わせ。ウィーン演劇界の革新者グラツツアーノの演出は「椿姫」に新たな光を与えた

演目の充実とともに深化させている。先シーズンの「ファルスタッフ」では、国立歌劇場の大歌手ヴァイクルと日本人指揮者阪哲朗が参加し絶賛された。

フォルクスオーパーの外壁にはシーズン的主要演目の舞台写真が飾られている。「魔笛」ではパミーナのシンだ。この写真の歌手はフォルクスオーパーの、つまりはウィーンのディーヴァ(歌姫)として人気の中嶋彰子だ。ウィーンの両オペラ座に立った日本人は少なくない。しかし、ハウスの看板歌手となると例を見ない。

今シーズンの初め中嶋さんはリハーサルにうかがつてみた。小柄でスリムな中嶋さんは、リラックスした感じでスタッフに声をかけ、彼らも気軽に「ハーハー」と応じる。調子を確かめながらも、エネルギーは自然と発現する。他の歌手やアンサンブルが滞ると、いつの間にか彼女を交えての車座となっている。「役に立てることなら発言するわ。信頼が音楽を生み出すの」と、後刻さらりと語ってくれた。取材のおり、好青年が笑顔で彼女のともに挨拶にきた。

国立歌劇場専属として人気急上昇中のジョン・ケン・ヌツォだった。仲間たちを、「お子さんを語るディーヴァの声は温かく、弾む。一転、ステージに立つことを「人の心を動かすこと、それが仕事」と沈黙の中

Akiko NAKAJIMA

中嶋彰子、ヨーロッパで大人気の歌姫が日本に帰ってくる!

北海道釧路市生まれ。15歳の時に渡豪。シドニーで音楽教育を受ける。90年全豪オペラ・コンクールで優勝。イタリア・ナポリにて欧洲デビューを果たし、インスピルック、ダルムシュタットの歌劇場専属歌手となる。99年、*ランメルモールのルチア*で大成功を収め、同年、フォルクスオーパー・ウィーンの専属歌手に招かれる。以来、抜群の演技力と幅広いレパートリーを武器に、最も注目さ

れるソプラノ歌手の一人として、ウィーンを中心に活躍を続けている。

●2003年の日本公演スケジュール
東京 新国立劇場

1月31日・2月8日

アラベッラ リヒャルト・シュトラウス/ズデンカ役

ザ・ゴールドチケットダイヤル(東京)
にてチケットを発売中です。

◆0120-279-301 10:00AM~5:00PM
(土・日・祝・年末年始12/30~1/3/休)

東京 新国立劇場

4月19・23・26日

ラ・ボエーム プッチーニ/ムゼック役

9月10・12・14・17・19・21日

フィガロの結婚 モーツアルト/
スサンナ役

問い合わせ先=新国立劇場ボックス
オフィス ◆03-5352-9999



能や歌舞伎の舞台から多くを学び自らの舞台に生きる。底無し的好奇心が自慢の中嶋さん



「椿姫」の原題「ラ・トラヴィアータ」は迷える女という意味。有名な「乾杯の歌」のシーン、愛に翻弄されるヒロインを象徴するかのようにヴィオレッタはビエロ姿だ。

それだけにその愛ははかなく、哀しく映る

でことばを探すかのように、しかし、きつぱりといふ。音楽への愛とプロ意識を表すこのことばは、画一的な

「洗脳されたお勉強」と、敷かれたレールから発せられるべくもない。一つ一つドアを開けてきた努力と才能

を愛し、伸ばす環境がこのアーティストを育んだ。

オーストラリアでのデビューの後、彼女はイギリス、ヨーロッパと、武者修行のように一人で劇場のオーディションを受ける旅を始めた。「もう終わっているのに、受けさせてくれるのよ」。受かつても彼女の挑戦は続く。最終的に一つと契約し、ほかは辞退するが、「あなたのキャリアにはそれがいいでしょう」のことばが返ってくる。こうした劇場人の懐の大ささを彼女は忘れないし、人脈として財産となっている。

イタリア・オペラ、ドイツ・オペラ、現代オペラ、バロック・オペラ、オペレッタと多彩な活躍をしている彼女だが、その魅力は声だけではなくい。「ラ・トラヴィアータ(椿姫)」は従来の絢爛豪華な舞台に繰り広げられるお涙頂戴とは異なり、人生の夢から目覚め、死に気づくヒロインの現実と幻影を描き出す心理ドラマとして描かれ、演劇性が要求されている。この課題に応えた演技力も彼女の魅力なのだ。

「日本人が頑張っているという意識

喝采に応えての「椿姫」のカーテン・コールを舞台袖から。 フォルクスオーパーに中嶋彰子ありとの評が後日音楽誌を飾った



ロージェ席の観客。オペレッタでは当意即妙なセリフのやり取りに笑い、オペラではアリアに喝采する。劇場を育てるのは観客なのだ



死の仮面をつけた不気味な一団は、社交界の偽善を、浮き世の生のはかなさを、ヒロインの死を告知している



たがいに声を掛け合い、音の調子を確認する楽団員たち

はないわ。私、中嶋彰子というアーティストができることがありますだけ』というディーヴァの日本でのステージに期待感は募る。